

龍舟正世教司類集

卷



冬木立	木敷風	千鳥	水鳥	浮標鳥	古鷹
鶺鴒	鷹	十五	ぬく鳥	重苦鳥	鶺鴒
鶺鴒	鶺鴒	十六			鶺鴒
鶺鴒	鶺鴒	十七			鶺鴒
十一月	霜月	新見世	冬玉	酉の市	子糸
子灯心	吹草糸	針糸	大陣海	針打	枯野
枯芦	枯芒	枯尾花	枯蓮	枯蒼耳	枯菊
枯葛	枯芝	霜枯	冬枯	冬冬	冬此世
冬回	冬日	經日	冬衣	冬月	冬雨
冬山	冬川	月河	鐘氷	氷	氷柱
雪車	雪竿	綱雪	雪	雪	冬構

冬目一

冬籠	埋火	火桶	火鉢	巨爐	手爐
温石	暖婆	共	因炉裡	榻	炭
衾	臥中	綉子	紙衣	足袋	靴
胼	曆賣	扱具引	綱代書	塙	氷抄
杜夫巢	輕	生油氣	親	絞糠	糸
乾鞋	干				
十二月	臘八	奉納	世	仏名	納豆
玉子酒	菜喰	世	寒凍	世	寒入
寒念仏	寒垢離	世	寒聲	師走	煤拂
餅搗	餅花	餅配	世	市	年忘
					古曆

齒朶	松子	長分	豆前	世追攤	鬼八外
園見	年本	年取	厄拂	鶴八巢	春近
妻情共	妻待	寺宿	妻隣	新修	私布刈
新年共	年暮	除夜	大晦日	大年	年内立妻

俳 芭蕉翁七書

行脚提註解 廿五條 暖職日記
 奥細道 十六篇 句合 菰句集

此書を翁、一世に於てありし所、多し七部に書をおけり、
 其の、行脚提註解、二十又除、は二つに書、通し分り先達より、
 まこと文意は、あつたれ知る、暖職日記あり、菰句は、例より、
 句合、十六篇、菰句集、おけ之部あり、其は、芭蕉翁、一は、三堂、
 あり、四方は、好士、あつたれ、求りて、地存より、あつたれ、

俳諧近世菰句類題集冬部

江戸雀堂来曾編

十月

十月ややくし日暮しつゝ 成美
 十月の中より十日を暮湯に 一茶
 十月の山をこゆるふかき 舟谷
 十月のあつたれかりけり 未紀
 十月の山をこゆるふかき 未紀
 十月の山をこゆるふかき 未紀

新修月
 松舟と雨のふりそよの月 雪雄

初七 五更 八時 入 市 月 三六

六月

ねくしき里の何とく山六月 未紀

一あふとるぬをいれ六月 未嘗

小春

新道 千 芥 山 未 三六

風あしとるぬの暮れ日暮色 完未

舟の家のくす縁のたぐい未 常

柿のあふとるぬのたぐい未 常

神々々つりたぐい未 菊嶋

冬一

初冬

と川あち城下乃町の湖の寺 三六

山鳥のくす縁のたぐい未 常

地ひの乳舟のたぐい未 乙二

あふとるぬのたぐい未 北映

東の衣

柿 獲 梅 花 未 常 白 支

我 仲 寺 未 常 未 嘗

非 送

さふとるぬのたぐい未 一 常

師會講

師會後や仙のまかし死の香 榊弓
師會講や身延の山の宮のまき 末曾
十夜

ささひとふ十おのけの昔節言 成美
杉原の舟着岐と股すおん 首三
楓もさく様もさくさくみる十夜也 菊貞
山越よりけし降乃十夜外 照南
さ井りし道と月あふ十夜外 貞理
湯取越

松急おりのくくくよかぬ越 棠丸
娘入母と指あはるくくくぬ越 末曾

夷備

一かむ爪乃ちささ夷備 大内丸
夷備はさく山さくくくく守 三平丸
昏くくくく御指もさく夷備 宗介
造り候とさく御指もさく夷備 宗九
夷備と福まの都の通 陰波
河川の都の都の夷備 石越
玄徳

翠花

まきののり日待たせしは跡の中
霜白し麦冷し余の足のはり士胡
往りしはあはれし相成の山路は
まきのおと二るはひるはり西塘
まきのひるはりしは相のまき
まきの霜のまきのあはれしは
霜のまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの

六七

そ梅

余のまきのまきのまきのまきの
深山の癖をまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきのまきの

早梅

早梅市考とむらひの草の華 月夜
早梅市考とむらひの草の華 月夜
まづ

糸山くさくさ 糸山くさくさ 枝よき 枝よき
葉やいよくさくさ 葉やいよくさ 枝よき 枝よき

山草心

山草心 山草心 山草心 山草心
山草心 山草心 山草心 山草心
山草心 山草心 山草心 山草心
山草心 山草心 山草心 山草心

冬ハ

茶心

茶心 茶心 茶心 茶心
茶心 茶心 茶心 茶心
茶心 茶心 茶心 茶心
茶心 茶心 茶心 茶心

枇杷心

枇杷心 枇杷心 枇杷心 枇杷心
枇杷心 枇杷心 枇杷心 枇杷心
枇杷心 枇杷心 枇杷心 枇杷心
枇杷心 枇杷心 枇杷心 枇杷心

樞心

樞心 樞心 樞心 樞心
樞心 樞心 樞心 樞心
樞心 樞心 樞心 樞心
樞心 樞心 樞心 樞心

三ノ菊

三ノ菊は、花の形が三つに分れる。葉は
細く、花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。三ノ菊は、
花の形が三つに分れる。葉は細く、
花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。

麦醇

麦醇は、麦の穂を乾燥させたもの。麦醇は、
古くから愛されてきた。麦醇は、
花の形が三つに分れる。葉は細く、
花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。

土根

冬十

土根

土根は、土の根。土根は、
古くから愛されてきた。土根は、
花の形が三つに分れる。葉は細く、
花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。

胡蘿蔔

胡蘿蔔は、根が長い。胡蘿蔔は、
古くから愛されてきた。胡蘿蔔は、
花の形が三つに分れる。葉は細く、
花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。

無

無は、何もない。無は、
古くから愛されてきた。無は、
花の形が三つに分れる。葉は細く、
花は白く、香りがよい。三ノ菊は、
古くから愛されてきた。

湖ノ邊ニ住ルル人々ノ言ク
祥ノ事ヲ見ルル者ハ捨留
湖ノ邊ニ住ルル人々ノ言ク

意

六可也ハ言フ所ニテ意ヲ知
月夜ノ光ハ多ク照ルル
意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知

意

冬十一

意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知

意

意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知

意

意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知
意ハ言フ所ニテ意ヲ知

木教行

リシヨウノセノ 隆きよみろと 士細
あらしきや ぬきい 唱をまきと 舟度
ふんせいの ねんろ ぬきまきと 二及
あらしきや ぬきい 唱をまきと 士細
あらしきや ぬきい 唱をまきと 三六
あらしきや ぬきい 唱をまきと 成美
あらしきや ぬきい 唱をまきと 榎き
あらしきや ぬきい 唱をまきと 高嶺

千鳥

冬十三

棉寺の ちのちの中よ ぬき鳥 士細
千鳥の ぬき鳥 ぬき鳥 三六
あらしきや ぬきい 唱をまきと 昔二
あらしきや ぬきい 唱をまきと 杉木
あらしきや ぬきい 唱をまきと 成美
あらしきや ぬきい 唱をまきと 実松
あらしきや ぬきい 唱をまきと 兼記
あらしきや ぬきい 唱をまきと 尺丈
あらしきや ぬきい 唱をまきと 五徳

雨まじく戸のたもと夕子鳥 屋鳥
千鳥ゆび改くつとと野る鳥 十丈
うまゆまゆまゆまゆまゆま 早譜
夕鳥

えくまのふゆまきり 松の影 士訓
えくまのふゆまきり 夕の波 乙二
えくまのふゆまきり 月夜 丁子
えくまのふゆまきり 旭の柳 湖介
浮麻鳥

いらづづいんくまゆまゆまゆま 可於也

冬十四

松島まゆまきり 浮麻鳥 丸琴
大松まゆまきり 浮麻鳥 未嘗
飛鳥

書休くまゆまきり 三光
まゆまきり 大に丸
飛鳥の鳥まきり 素齋
まゆまきり 完未
まゆまきり 武陵
まゆまきり 雪雄

ほの〜〜りや枯露のきつらや 首こ
きき黄菊 枯露のあ〜〜の 定来
枯露のきつらや 枯露のきつらや 景徳
鹿子菊のあ〜〜の 枯露の 貞徳

枯
草

よ〜〜の日のあ〜〜の 枯露の 古胡
あ〜〜の 枯露の 定来
枯露の 枯露の 木僊
枯露の 枯露の 人 菊取
ふ〜〜の月〜〜の 枯露の 貞徳

冬十九

枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 二
枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 貞徳

枯
草

枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 酒き
枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 貞徳

枯
草

枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 貞徳
枯露のあ〜〜の 枯露のあ〜〜の 貞徳

枯
草

道のよめあめのかき 枯きくろ 三六
枯きくろ 人のけしき 五明

枯菊

菊のしんばら 花のしんばら 三六
枯菊のよめあめのかき 三六
枯きくろ 山は白ひのきり 南竹

枯葛 枯きく

枯きくろ 月夜 卷のしんばら
枯きくろ 野骨 三六

霜枯

冬 三六

霜枯のしんばら 花のしんばら 三六
霜枯のよめあめのかき 三六

冬枯

冬枯の山は白ひのきり 三六
冬枯のよめあめのかき 三六

冬空 冬の中

冬空のよめあめのかき 三六
冬空のしんばら 花のしんばら 三六
冬空のよめあめのかき 三六
冬空のしんばら 花のしんばら 三六
冬空のよめあめのかき 三六
冬空のしんばら 花のしんばら 三六

江のほとり花のあきののちの月 万和
 大竹人志月もる上りちの月 体二
 ちかちかう梢もるふくちの月 兼紀
 ちの月むすの影のさのち 早徳
 ち雨
 ちの雨ちの雨とてむすもる 三六
 ちのちのちのちのちのちのち 兼紀
 ち山 ちの川
 晴ち晴ちの柳もるちの山 万和
 ちの山 ちの川 兼紀

冬 廿二

影のちの影の影の影の影の影 柳巻
 ちの川ちの山ちの影の影の影 兼紀
 月 柳巻
 ちの山 ちの川 三六
 ちの山 ちの川 兼紀
 白浪ちの山ちの影の影の影 士湖
 ちの山 ちの川 三六
 山鳥 ちの山 成美
 山鳥 ちの山 午心

沐浴

沐浴は神事なり、此の如く山ノ月
ニキリテ、此の如く沐浴
可軒
多ク沐浴は、此の如く
貞照

おのりしのかまのけしは、此の如く
可照

此の如く、此の如く、此の如く
来曾

電車

電車ノ、此の如く、此の如く
午心

此の如く、此の如く、此の如く
来紀

電車ノ、此の如く、此の如く
来紀

冬三

電車 細費

電車ノ、此の如く、此の如く
来六

細費、此の如く、此の如く
来曾

震

此の如く、此の如く、此の如く
し二

山ノ月、此の如く、此の如く
、

山ノ月、此の如く、此の如く
、

山ノ月、此の如く、此の如く
午心

降、此の如く、此の如く
早讀

震

かきりしちせし足と巨嶺の 吾人
旅中もはちし巨嶺の山は 未嘗
その中へしししとぬ巨嶺の 藍水
ゆ嶺 温石
よめあのかかすの地く伊豆の海 未嘗
温石より遠くは 故をたなひき

娘嫁

古娘嫁夢り蓋といし一首と
松竹の娘嫁のさるおの守乙二

田舎裡

田舎裡いし山とぬあふの力乙二
よい風入るま鞋りしし田舎裡は 未嘗

楮

楮葉子拾ひあつたをなせし 三斗
楮葉の我屋のさしひきし 葉花
楮のしとるの楮のききる上 標き
楮のりのさるしとせし 未嘗

炭

炭をいししとぬおのさるし 成美
松竹のさるしとぬおのさるし 午心

松竹の三冊を巻の中心に 常は

わらわらめいふやうに編みあは 未嘗

帛衣

括子をとくく懸のつく懸衣は 星譜

紅日の出ふと夜く帛衣は 未嘗

足袋

松竹巻の中心に足袋の巻は 士綱

皮足袋の十とせつもの巻は 葵亭

足袋の巻はつらなる巻は 月夜 未嘗

靴

冬廿八

あつちやま川を中より上 大に丸
靴の糸子病りあふり 糸は
靴の明石の月かききき 葉英
あつちやま川を中より上 葉英

膝

おんあしをひきくはるは 利の膝 長樂

うぬとよきく膝の糸足は 未嘗

唇責 夜無思

我々ののりくはるは唇責は 定来

草鞋の先集りかおん川 未嘗

細代も

あつたまのうらみとまきり細代も
月代や身もまきりあつたま
おの代りあつたまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま

塀

塀はつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま

冬廿九

氷真 鮎

あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま

杜文真 鱧泊

あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま

冬廿九

あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま
あつたまのうらみとまきりあつたま

かく終戸芝たつぬ鼻くら石後

二月

奥山りしきく梅のみの十二月 左琴
枝ま屋のしゆふなふくく二月 未嘗

臘八

臘ハ片瓜えあふく寸量 昔こ
臘ハもろぬぬぬぬぬぬ 甚而
臘ハ片骨く皮く梅の元 未嘗

ま初

上里や阿方ぬかぬかぬかぬか 宿人

冬世一

まじりたるのしきききききき 石岷
きりきりきりきりきりきり 可磨
まじりたるのしきききききき 未嘗

佛名

あつしと腹のふくしつゆ名 城美
佛名やうしきく結も若のき 未嘗

納ま

納まや結の上節のぬあじ 可磨
納まや結の上節のぬあじ 可磨
心と結。梅と結。結と結。 未嘗

月夜

何ぞかたしは後いづれか
何ぞかたしは後いづれか

玉子酒

玉子酒や〜志ぬれは
よむかたしは後いづれか

夢答

さ〜一本持〜あ〜し夢
夢答 於れは〜のおとめ
よ〜いづれか〜あ〜し夢

冬卅二

き

葉くは〜あ〜あ〜あ〜あ
月夜九十二のあ〜あ〜あ〜あ
葉答梅〜能得に〜あ〜あ

毎夜〜月〜あ〜あ〜あ
葉知〜あ〜あ〜あ〜あ
揚〜あ〜あ〜あ〜あ
さ〜あ〜あ〜あ〜あ
さ〜あ〜あ〜あ〜あ
足掛〜あ〜あ〜あ〜あ

雪の車まゝか人の朝 早湯
 ついでに批弁とよまきう那 俵二
 地者の著うけのまきん 其樂
 ちんちんちんてまきんはれ 季獲
 まき目を捨ぬ能く浪踏嶋 万和
 鳥のこぼれまきんは山の松 乙二

凍る

凍標のまきんはうけの著る 澧水
 凍れりまきんは鴨の上をな 系九
 凍れり酒のまきんは寺の仲う南 未嘗

冬世三

寒入 寒内

松のまきんはなれぬ寒入の人 二五九
 まきんはなれぬ寒入の人 未嘗
 狐のまきんはなれぬ寒入の人
 まきんはなれぬ寒入の人 系録
 まきんはなれぬ寒入の人 乙二
 まきんはなれぬ寒入の人 五未
 まきんはなれぬ寒入の人 成美
 まきんはなれぬ寒入の人 積雪

き月

き月の物まきんはなれぬ寒入 積雪

月七何七まうのいこる御走は 寒松
凡もろ登カ物七御走は 宿人
竹の宿をぬくまの御走は 兼靴
只所山岸あしこる御走は 竹寛

蝶掃

ふ是より生く掃む服形は 才羽
蝶掃やあしカキキうす
蝶掃や掃くをこ所ありは 成美
蝶掃はこるこるこるは 兼靴
蝶掃や娘く姑よそるこるは 雨塘

冬世五

ぬくもを炭団の蝶を春の蝶 三才
櫻の本にあしをけり春の蝶 兼靴
くくはまの宿のりりは蝶 一日 菊塙
掃おす掃や戸の掃尾は 樓半
はこるひけり中道いものりり 星譜

さるまの蝶

さるまの蝶のこる御走は 三才
さるまの蝶のこる御走は 兼靴
さるまの蝶のこる御走は 兼靴

蝶掃

遠くまでと夢をいそぐと
枕さす

いそぐと夢のいそぐと
枕さすし夢さすに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに

冬 廿七

追推 夏 廿八

あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに

夏 廿九

あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに

鶴条

いらすぬぬあふふくぬん 三六
年ふのふふふふふふふふ 首三

ふふふふふふふふふふふふ 七二
かふふふふふふふふふふ 見五

春通

ねふふふふふふふふふふ 三九
桶乃梅え日ふふふふふ 七二

春情

片ふふふふふふふふふふ 核七

冬世八

美侍

ふふふふふふふふふふふ 七二

方ぬふふふふふふふふふ 三九
井のふふふふふふふふふ 七二

春情

年乃名ぬふふふふふふ 三九
春情 梅や横や鳥乃春 七二

難作

春情 梅や横や鳥乃春 七二
春情 梅や横や鳥乃春 七二

り

川草花をよみしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし

さましくとよみしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし

冬世九

隙夜 文海日

さましくとよみしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし
川上りやあはれしはあはれし
川下りやあはれしはあはれし
川中りやあはれしはあはれし

文由も鼻面あつる禁い
大もり大もり大もり大もり
大もり大もり大もり大もり
大もり大もり大もり大もり

壬午之春

